

〈研究ノート〉

音楽表現領域の指導に関する考察（2）

—保育者及び幼児・初等教育者養成課程の教育実践の中で—

梅本 由紀* 金井 玲子* 小島 邦明* 出口 雅生*

要約

本稿は、浦和大学こども学部における音楽表現領域科目のうち、ピアノ演奏技術の習得を目的とする科目群を除く4科目について、その担当者が実践報告や今後の展望を述べたものである。保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成課程を持つ同学部が取り組んでいる音楽表現領域の教育実践は、保育・教育現場の実際的な要請に応えると同時に、学習者が「表現」の本質を捉え、こどもの豊かな心情を育むことのできる保育者・教育者となることを目指すものである。

キーワード 音楽表現、歌唱表現、器楽表現、合奏、創作、作曲、音楽文化、保育者養成、幼児教育、初等教育、教職課程

目次

はじめに

1. 小学校「音楽」の歌唱指導時に必要とされる力（小島）
 - 1.1 小学校音楽教育の現状と背景
 - 1.2 音楽の授業で具体的に重要な点
 - 1.3 授業科目「ヴォーカルアンサンブル」について
 - 1.4 まとめ
2. 保育者・児童教育者として器楽・合奏を学ぶこと（梅本）
 - 2.1 はじめに
 - 2.2 学生自身が音楽を楽しむための授業構成
 - 2.3 個々のスキルアップをしてゆくために
 - 2.4 履修後の変化について
3. 指導者の創造を教材に活かす力を養うために（出口）
 - 3.1 授業科目「ソングライティング」の位置付けとねらい
 - 3.2 「ソングライティング」の授業概要
 - 3.3 アナリーゼとソングライティング
 - 3.4 「自由な題材」による創作実践
 - 3.5 「物語のうた」をテーマとする創作実践
 - 3.6 まとめ
4. 手作り楽器とその活用（金井）
 - 4.1 新しい試み
 - 4.2 きっかけとなったイベント
 - 4.3 保育所保育指針に示されている「表現」領域の内容との関連
 - 4.4 人間の本质としての、音楽への共感と楽器遊び
 - 4.5 「手作り楽器とその活用」の内容
 - 4.6 まとめ

はじめに

浦和大学こども学部は、保育士と幼稚園教諭の養成課程を持つ「こども学科」1学科体制で2007年に開設された。「こどもと育つ」を教育理念に、親子のひろば「ぼっけ」の教育研究面での活用、カナダ・ライオンソン大学こども学科との学術提携などユニークな特徴を持ち、表現領域の分野でも「質の高い保育は表現の本質をふまえて行われるものである」という考えのもと、表面的な技法や技術の獲得にとどまらない文化・芸術の本質に迫る授業内容を保持してきた。2017年に小学校教諭の養成課程を持つ「学校教育学科」が新設されたことにより、学部の教育研究の直接の対象である「こども」の範囲が広がるとともに、従来のこども学科の教育課程の特徴であった「こども総合」科目群が再編成され、学部共通科目として配置された。

この研究ノートは、このような経緯を持つ浦和大学こども学部における12年間の音楽表現領域における教育実践を振り返りながら、担当教員がその成果の報告や今後の展望を2回の連載で記すものである。浦和論叢第61号に掲載した第1回目の「音楽表現領域の授業科目全体の俯瞰」および「ピアノ指導に関する報告や論考」に引き続き、今回は「ヴォーカルアンサンブル」「器楽・合奏」「ソングライティング」の担当者による授業実践報告と、「こどもと音楽」における新たな試みについて述べる。

1. 小学校「音楽」の歌唱指導時に必要とされる力

1.1 小学校音楽教育の現状と背景

令和2年度から新学習指導要領が完全実施となり、教科書も今年度中に採択が決まり新しくなる。新学習指導要領の改訂の特徴は、「こどもの視点」「資質・能力の三つの柱（知識及び技能・思考、判断力、表現力等・学びに向かう力・人間性等）」「見方・考え方」「生活や社会とのつながり」の4つで、これまで曖昧にされてきた「知識」が明確化された。

現在の小学校における音楽専科教員の配置は東京都でも専科不在で講師対応、地方都市では全学年担任が授業をする学校も多い。これまで低学年の音楽指導だけであったのが、全学年指導する小学校が増加している傾向である。また、学校行事のなかで音楽行事が重要な存在になっている学校も多い。儀式・学芸会・音楽集会等、これらの行事は音楽科不在の学校では音楽経験の少ない教師が担当することがある。このような現状の中で小学校の音楽教育の必要性、大切さ、難しさを教職課程において実習を含めて学ぶことは極めて重要である。

1.2 音楽の授業で具体的に重要な点

1) 学校教育のなかの歌唱指導として主体的、対話的で深い学びを実現する音楽科学習を実践する。

①音楽活動の楽しさをこどもたちに感じさせる。

②よさを学び合いながら、声と心を合わせて問題解決する活動を行う。

- ③楽しい活動のなかに基礎的、基本的な内容を取り入れる。
- 2) こどもたちが伸び伸びと表現できるように、心を解放し、伸び伸びと歌える人的、物的な環境を整える。
 - ①先生と児童との人間関係を築く。
 - ②児童同士の人間関係を築ける環境を整える。
 - ③音楽室の環境を整える。

1.3 授業科目「ヴォーカルアンサンブル」について

1) 概要と目的

「ヴォーカルアンサンブル」はこども総合科目群に配置された選択科目で、1年次から履修が可能である。人の声とからだを用いたアンサンブル表現の楽しさとその意義を伝えられるようになること、わらべうたや童謡、日本の音楽、西洋クラシック音楽やポピュラー音楽など様々なジャンルの音楽内容に適した発声とアンサンブル展開能力を身につけ、自らの指導実践に生かせるようになることを目的とする。

2) 授業終了時の到達目標

発声技術を身につけ、様々なジャンルのアンサンブルを楽しみながら表現できること。

3) 演習内容

手軽に演奏できる形態として少人数のアカペラやボイスパーカッションを合唱集団として学習活動をしなが、合唱指導法・発声法を学ぶ。

①発声法（小学校教員の「発声の重要性」）

教職課程に於いて音楽を学ぶ機会は極めて短い。簡易伴奏を付けて歌う等、小学校低学年の授業実態に即した内容を学ぶわけだが、ピアノの習得自体が本来年月のかかるものである。

2～4年間で発声の基礎から習得しなければならない。小中学校の音楽授業の中心は歌唱である。幼少期に基礎を身に付けることは音楽でも大切なことである。

小学校低学年の声は声域も狭く、ともすると地声で歌う児童も多い。地声でも美しく伸びやかに聞こえる声もあるが、そのまま成長しても音域は広がらず、伸びやかな響きのある声にはならない。変声期で最も苦勞する声になることが多い。日本人は10歳～15歳くらいの間に変声期をむかえるこどもが多い。変声前から変声後までの小中学校の時期に学ぶ歌唱指導の重要性と難しさがここにある。

専門的な発声法に頼るのではなく、教える側が音楽において歌うということの基本中の基本をこどもたちに伝えることができれば、より多くの楽曲を歌えることになり、歌うことが好きなこどもたちが増えていくことにつながる。また、指導方法として、「良い声を出しましょう」「響きをつくって」のような指示では無く、声を出すという行為を「たとえ」や「他の動作」等でより実感し体得させる工夫が必要である。

以下は「発声法」についてこどもたちに分かりやすく指導するために、演習のなかで継続的に学生に示した例示である。

A 発声の基本（のびのびとした明るい声を出すために）

a 姿勢

- ・「目線を遠くに」「背すじを伸ばす」「つま先に重心をかける」の3点に留意して声を出す。

b 呼吸（腹式呼吸の習得）

- ・お腹のまわりのチューブに息をまんべんなく入れるような感じで息を吸い込む。
- ・肩や胸で息を吸うと、そのあたりに力が入って声が出しにくくなる。

c 息の吸い方

- ・一つのフレーズに必要な分だけ吸う。（吸い過ぎは良くない）
- ・声を出すときは最後までお腹の緊張を感じながら少しずつへこんでいくようにする。その状態を“支え”という。

d 息の吐き方

- ・吐く息はお小遣いと同じように上手に少しずつ使おう。
- ・上手に吐くと正しい音程、美しいひびきで歌える。

B 声の出し方（共鳴）

- ・声の集まるポイントを探そう。
- ・縦開き、横開き 自分の特徴を知ろう。
- ・口を開いていない人は心も開いていないのかな。
- ・声を前に飛ばそう。
- ・ひびく声はホームラン。きれいなフォームで遠くに声をとばそう。
- ・歌声と話し声の違い。
- ・ひびきは上に、支えは下に。
- ・目から声を出すつもりで。
- ・響きをつくりやすい発声練習。「m a」「n a」

C 合唱の声の出し方

- ・自然で無理のない歌い方で。
- ・「周りの声と合っているか？」と、ふと思って。
- ・声の高さを1ヶ所でも合わせようとする。

②楽曲演習

幼児期の歌から小学校低学年～高学年まで、学年に応じた歌い方や楽曲の特徴や捉え方を小学校共通歌唱教材や親しみやすい歌唱教材から学び、どのように歌うと楽曲のよさを引き出せるかを学生各自の発声から表現したい歌唱法を体得する。また その演奏が児童へどのように伝わるか又はどのように伝えたいかを考えて、より効果的な演奏ができるように演習する。

発声と同じように「たとえ」等で表現したいイメージを分かりやすく体得できる工夫が必要である。

- 例
- ・曲全体をテレビドラマのようにとらえる。
 - ・「曲の山はどこ？」を必ず意識する。
 - ・クレシェンドの入り口は狭く、出口は広々と。
 - ・デクレシェンドは全員で最後の瞬間まで気配りを。
 - ・言葉の感じを音にのせて。
 - ・「滑らか」と「弾む」を歌い分ける。
 - ・「プレス」の位置を守って。
 - ・大好きなフレーズをもっと伝えて。

アンサンブルの演習では「パートナーソングとカノン」で外国の名曲や日本の歌との融合、「ボイスパーカッション」でアカペラのアンサンブルの楽しさ、「遊び歌〜リズムアンサンブル」で古くからある遊び歌やリズム遊び等の楽しみ方やリズムの面白さを体得する。

合唱曲では文科省唱歌の「ふるさと」と東日本大震災で被害を受けた福島県小高中学校の卒業生が作詞した「群青」で、2部合唱でも楽曲の魅力とメッセージの強さで歌う側、聴く側どちらも引きつけられる音楽の魅力を手得する。

③レポート

演習を通して学んだことを「自分の声の特徴と正しい発声について」「楽曲を任意に選び、どのような演奏を行うか、具体的に示す」について、声についての正しい認識、楽曲の理解と演奏対象者を明確にしてどのように演奏するかを文章で表現する。

楽曲分析の留意点

- ・全体的な曲の構成をとらえる。
- ・音楽的なエネルギーの高まりや移り変わり、到達点。
- ・歌とピアノ伴奏のかかわり。
- ・詞の内容と言葉のニュアンス。
- ・各パートのからみや動き。

1.4 まとめ

音楽教育は単に技術や知識を教えるだけでなく、音楽の楽しさや音楽の魅力伝えることが重要と考える。教えるときに必ず、教える側の人生や人となりが見える。子どもたちがこの先生に教わってよかったと思われるように教師自身が音楽を楽しみ、音楽の魅力を体現できなければならないと考える。

ヴォーカルアンサンブルの授業で、様々な歌に出会い、楽曲の魅力を感じながら、将来子どもたちに音楽を通して思いを伝えたり音楽のもつ力を感じさせることができる教師になってもらいたい。

2. 保育者・児童教育者として器楽・合奏を学ぶこと

2.1 はじめに

浦和大学こども学部の授業科目「器楽・合奏」は、こども学科の保育士選択科目として2年次以上の学生を対象に開講されている。音楽そのものを楽しみながら、こどもに合奏指導する場合、こどもと合奏する場合、こどもに鑑賞してもらう場合、それぞれに対応できるように各自のスキルアップを目指している。

2.2 学生自身が音楽を楽しむための授業構成

音楽を楽しむことに関しては、段階を経て進化できるように構成されている。

まず拙作の簡易なクラッピングミュージック（手拍子の音楽）を用いて、楽器操作の技術にとらわれずに合奏をすることから始める。同じ楽譜を用いて「声」のみ、「打楽器（音階のないもの）」のみ、「音階のある打楽器や鍵盤楽器」のみ、それらの「混在」、と使用楽器を変えることでそれぞれ全体の音の変化を味わいながら、グループ内の代表者が曲の初めの合図を出すこと、互いの音を聞き合うこと、合奏することに慣れてゆくようにしている。

次によく知られたTVCM曲の原曲（クラシック音楽や讃美歌）をメロディ、コード、ベースの3パートに分かれて鍵盤楽器で合奏をする。このテーマで取り扱う楽曲は数曲あるが、毎回新しい曲を配布し翌回に持ち越さないことを基本にしているため、読譜のスピードを上げなければ合奏に参加できない。学生同士が切磋琢磨しながら読譜競争をし、練習をしながら音楽の3要素を含んだ成り立ちを学ぶとともに、訪問演奏の際のレパートリー作りにも役立っている。この理由は鑑賞対象者が幼稚園・保育園だけでなく、老人向けの施設で演奏する機会もある上、卒業後に介護の資格を取得して介護施設で勤務するケースもあるからである。

また、少人数授業の特性を活かし、所有数が少ない楽器を順番に体験できるので視野が広がりやすく、音楽の聞き方を多角的にするきっかけを作っている。自席で簡単なリズム練習をした後、「ドラムセット」を1人ずつ交代で演奏体験をする。これは手足を別々に動かす難しさを知り、実際の楽曲ではこれを止まらずに数分続けなければならないリズム表現の奥深さ、大変さを十二分に理解できる。

「管楽器の体験（フルート、サクソフォン、トランペット）」ではピアノと同じ高さの音が出ない移調楽器について、ピアノやキーボードを使って各楽器の「ド」の音と同じ音を探り弾き、当てる体験から始める。これは園児に向けて演奏する機会があった時に、同じ楽譜を使うと不協和音になる可能性があるため、具体的にどの楽器がどのような移調をするのか全て覚える必要はなく「自分のドと違う音を出す楽器がある」ことを知るためのものである。自分が管楽器を演奏しなくても共演者が管楽器を使う場合も充分考えられる上、保育者でなくても、保護者や友人という立場で園児の前で演奏する機会があるので、私の経験からもかなり重要だと考えている。移調楽器について学習した後は、実際の楽器を手を持ってそ

の重さを実感したり、簡単に演奏しているように見えるものでも打楽器やピアノと違って音を出すことそのものが安易ではない楽器があることを、学生たちは悪戦苦闘しながら体験し、学んでいる。

幼児が管楽器を持ったり演奏したりすることは非常に困難であるが、ペットボトルや乳酸菌飲料等の小さい容器は手に持つことが可能かつ、音が鳴る仕組みはフルートと同じなので身近なものを使った演奏ができる。また、水を注いだガラスのコップやワイングラスの縁を濡れた手で触れて音を出すグラスハープも体験すると、身近なものを使うことや、音の振動を目で見るができる。

「グランドピアノとアップライトピアノ」に関しては、可能な範囲で蓋を開けた状態を見てもらうようにしている。楽器の周囲に集まって音の出る仕組みを見せ、ペダルの役割を説明した後は、実際に1人ずつ蓋の開け閉めを体験する。特にグランドピアノの大屋根は意外と重量があるため、譜面台の操作法も含めて正しい使い方をしないと幼児が指を挟んで危険だからである。

次に、いわゆるピアノのための難しい楽曲は弾けなくてもペダルの使い方倍音を響かせた音の世界を表現できることを体験したり、グランドピアノの下に入って様々な場所を触って音の振動を感じると、更にピアノを鮮やかに感じられるようになるのではないだろうか。

五線を使用した楽譜に慣れている、またはその世界できちんと演奏することを求められている学生達にとって、五線を使用しない「図形楽譜」の世界は新鮮のようだ。ジョン・ケージの「4分33秒」の楽譜を見せながら実際の演奏を見聞きすることでサウンドスケープを体験し、普段あまり気に留めないような音に注意するきっかけを作っている。

別な図形楽譜の作品も鑑賞し、絵画のような楽譜もあることに触れると、正解・不正解が曖昧な世界があることを体験できる。次は実際に、物語に音を入れるための簡単な図形楽譜を書けるようにするため、短い話を配布して1人ずつ発表してゆく。練習時には成功したが発表時に失敗するケースがあるので、記憶に頼るのではなく図形楽譜として記録することの有効性を体験させる。慣れてきたら長い物語をグループごとに役割分担を考え、読み聞かせしながら音を入れ時間内にまとめて「物語を立体的に創作・発表」する。これを数グループに分けて行い、互いに鑑賞して感想を書くようにすると、同じ物語が全く違う表現になることや、発表の仕方を工夫したりマナーの部分の気付きにもなるので、飽きずに鑑賞できる。

2.3 個々のスキルアップをしてゆくために

リズムの読譜に関してはクラッピングミュージック（手拍子の音楽）を通して3パートに分かれたリズム合奏から始めている。読譜が難しい学生には得意な学生が教えたり、一緒に演奏することで、できるだけ学生自身の力で工夫して全員が楽しめる合奏を目指している。

音価の考え方は（付点を除いて）基本的に音符の画数が増えると音価が小さくなるのだが、画数が増えるとアイテムが増えたように感じて、音価が大きくなると勘違いするケースがあるので見逃さないよう板書で説明しながら、時には簡易的にリトミックの要素を取り入れた

り、リズムに歌詞をつけて親しみやすくなるよう味付けしながら進めている。

音程の読譜に関してはピアノを使って、右手で長音階を全調弾けるようにすることで音階を読み慣れてゆく。手始めにハ長調と同じ指使いの調を先にまとめて練習してしまい、指使いごとに学習の順序を整えることで学生が弾きやすいようにしてあるので達成感を得やすく、どんどん自習ができるようになっていく。

これを進めてゆくにつれ調号の読み方を理解できるようになり、シャープやフラットが増える順番を覚えることで読譜のスピードアップにも役立っている。これは鍵盤楽器を使用した楽曲の合奏時に活かせるので、読譜に慣れない学生は楽譜にドレミのふりがなを書き込み、調号や臨時記号に該当する音に目印をつけてから練習することが自主的にできるようになっている。

また、これに付随してシャープやフラット、ナチュラルを有効にするための正しい書き方の練習や、ト音記号やヘ音記号を書く練習も行う。筆者が毎月ピアノ演奏で訪問している東京都稲城市の「もみの木保育園」では卒園生を中心としたゴスペル聖歌隊「エバーグリーン・クワイア」がある。園長が主に作詞作曲した作品に乗せて子ども達がステップを踏みながら歌い、交代で打楽器演奏や指揮も行う活発な集団である。職員はキーボードやギター、ベース等の伴奏をして子ども達と共に月1回のライブの他、全国でライブ活動やCD収録等を行っている。このような音楽教育の進んだ幼稚園・保育所に関わるようになった場合でも身につけた読譜力や指導力を活かし、対応できると考えている。

2.4 履修後の変化について

社会の進化によって何でも便利に素早く手に入るようになり、デジタル記録さえしておけば仲間から情報をもらうことができるため、その場にいる必要さえないような生活が当たり前ようになっていく。しかしながら保育者・幼児教育者としては特に、自分より未熟な者を嘲笑したり、責任感が欠落し周囲に気を配れないために事故が起こるようなことはあってはならない。

授業では早い段階で両手の指10本を独立して動かす練習を取り入れているため、学生は自分自身の身体、指さえも思う通りに動かないもどかしさに、一気に年老いてしまったような衝撃を受ける。また、ドラムなどの楽器を体験することで、ますます不器用な自分と対面することとなる。両方とも器用のできる学生の場合、皆がそうやって簡単にできるものではないことを目の当たりにするので、上手にできるようになるためにはどのように説明したら良いのかを考え、それを実践する絶好の機会になっている。

このように【器楽】を通して楽器を演奏する技術や取り扱う方法、音楽理論のような手間暇かけないと身につかないものがあることを体験すると、思い通りにできないことがあっても忍耐力がつくため他人への批判が大きく減り、普段交流する機会がないような仲間をも助けようとする雰囲気生まれてくる。

また【合奏】を通して、写真や録音等で記録したものを後で見返すのではなく「今この瞬

間」に気を配ることを体験し、対象者を見極めて集中することは、生身の人間に向き合い、小さな命を預かる職業を学ぶ学生の意識作りに役立っている。

3. 指導者の創造を教材に生かす力を養うために

3.1 授業科目「ソングライティング」の位置付けとねらい

2017年に浦和大学こども学部に学校教育学科が設置された際、音楽表現活動における「創造的な工夫」ができる能力を身につけることを主なねらいとする、「ソングライティング」と「合奏アレンジメント」の2科目が新しく開設された。両科目ともに、「こども総合科目群」に配置された選択科目である。受講対象はこども学部全体、乳幼児を主な学びの対象とするこども学科と児童を学びの対象とする学校教育学科それぞれの2年次以上の学生で、「こどもと音楽」「初等音楽」「ピアノ基礎A・B」「ピアノ演習A・B」といった、それぞれの学科の音楽表現基幹科目終了後の履修となる。

ここでは、この2科目のうち「ソングライティング」の授業実践の報告を行い、保育者・児童教育者を目指す受講生が、どのような経験をし、どのような資質を獲得したかを述べ、この授業科目の成果や意義を検討する。

3.2 「ソングライティング」の授業概要

授業科目「ソングライティング」では、「ソングライティング」を「作詞と作曲を行い、『うた』を創ること」と定義し、その基礎技法を学び、「うた」の創作、伴奏を含む楽曲全体の構成、作品発表までを行うものとしている。以下、シラバスに記載されている授業各回のテーマを紹介する。

1. ソングライティングとは
2. ソングライティングの基礎
3. 楽曲アナリゼの方法Ⅰ（日本のうた）
4. 楽曲アナリゼの方法Ⅱ（世界のうた）
5. 創作Ⅰ（こどものうた）
6. 旋律法
7. 作詞法
8. 創作Ⅱ（物語のうた）
9. 和声法
10. 伴奏法
11. 創作Ⅲ（自由な題材）
12. ソングライティングと著作権について
13. 創作Ⅳ（伴奏付け）
14. 発表
15. まとめ、振り返り

2019年度前期の実施においては、8. 創作Ⅱ（物語のうた）と11. 創作Ⅲ（自由な題材）の順を入れ替えて行った。理由については、授業の成果とも関連があるため後述したい。

この学期の本授業科目の受講学生は17名で、そのうち本授業の受講前に「うた」の創作を経験したことのある学生は1名のみであった。経験の少ない、あるいは全くない学生にとって、作詞法、作曲法の初歩を学んでもすぐに実作に取り掛かることは困難である。そのために、授業科目の前半では、童謡やアニメソングなど受講生にとって馴染みの深い楽曲の簡単なアナリーゼ（Analyse（独）楽曲分析）を行った。

3.3 アナリーゼとソングライティング

アナリーゼ（Analyse（独）楽曲分析）は、実際の音楽作品がなぜそう響くのか、なぜその作品を聴くものにある印象を与えるのかを、音楽上の専門的な理論分析を通して検討するものである。これは音楽のあらゆる専門家にとって大なり小なり必要な行為ではあるが、保育者・児童教育者を志す大学生を対象とするこの授業の場合、あまりに専門的な理論分析を求めることはできない。

この授業で行ったアナリーゼは、極めて単純で、受講生が良く知っていることのための楽曲から、①音階列の順次進行でできている部分と分散和音でできている部分をそれぞれ抽出すること、②リズムを歌詞の単語・文節ごとに分けて抜き出すこと、の2つである。ここで大切なことは、音階と和音に関する理論上の知識を楽譜を通して用いることよりも、歌うことや演奏することによる感覚的な認知に頼ることである。この単純な作業を通して、ほとんどの受講生が音程やリズムの簡易なパターンを感覚的に用いて機械的にメロディーを作る方法を得ることができた。

授業前半のまとめとして、これらのパターンを用いて、寺村輝夫作の童話「ぞうのたまごのたまごやき」の中の登場人物が歌う「うた」の歌詞への曲付けを受講生全員でアイデアを出し合う形で行った。（譜例①）

この活動後に、さらにこどものうたやJ-POPの、発展させた楽曲分析を行い、作詞者や作曲者が創作の際にどのような工夫を凝らしたと考えるのか、意見を出し合うことが可能となった。この一段上のレベルのアナリーゼは、音楽作品（教材）と自身（指導者）の関係を客観的に把握するために有効な方法であり、多くの指導教材の中から実際に使用する教材を選択する際の指針の一つとなるものでもある。

3.4 「自由な題材」による創作実践

当初は「物語」を題材とする創作を先に計画していたが、受講生の興味と授業の到達目標に考慮し、「自由な題材」による創作実践を授業全体の中盤に行うことに変更した。結果としての楽曲の出来よりも、その思考過程を重視し、テーマ及びジャンルは自由という設定をした。創作された楽曲を、「音楽ジャンル」を示す言葉で紹介すると、「J-POP」が3グループ（1グループは個人）、「童謡」が1グループ、「校歌風」が1グループであった。「J-POP」

風の3曲の内容は、①授業の空きコマを友人と楽しむ大学生活を、憂鬱さも含め、素直に明るくうたった内容、②公園で独り時間を過ごす自身の心情をうたった内容、③男子大学生が望みのない恋愛をうたった内容であった。3曲中2曲が暗い心情を表す短調の曲となったのは多少意外であった。「童謡」ジャンルの1曲は、④絵本「ぐりとぐら」の主人公2人をテーマとする内容で、メロディの特徴はイタリア歌曲「フニクリフニクラ」を模した部分にある。一種のパロディであるが、私には大変成功しているように感じられ、おそらくこどもはこの曲を喜んでうたってくれるものとの評価を伝えた。

（譜例②）最後の「校歌」ジャンルの1曲は、⑤作品自体がパロディで、いわゆる「校歌」調のメロディに乗って浦和大学の事象が学生が目線で語られるユーモアを持っている。これらのすべての楽曲の特徴は、歌詞もメロディも受講生自身の記憶にある何物かをつなぎ合わせ作られたものであるが、それぞれの作品自体は全体として独自の表現内容を持っている点にある。授業前半の活動が、自身の生活、興味、関心から自由に発想された「作品」の創作に繋がったものと考えている。「無」から「有」を生み出す、人の「創作」という行為の一端を経験し、その創作物の意味を感じ取ることが、音楽表現領域における教材の大部分を占める「音楽作品」の文化的価値を体感する力に結びつけばと期待している。

3.5 「物語のうた」をテーマとする創作実践

本授業科目の締めくくりとなる課題として、「物語のうた」をテーマとする創作を与えた。創作行為には良くあることだが、かけた時間やエネルギーが作品の出来不出来と必ず比例するというわけではない。授業担当者として筆者がこだわったことは、作品の総体を見た時に「オリジナリティ」が感じられるかどうかである。創作過程の指導としては、「答え」=「作品の完成像」を柔らかくイメージさせること、イメージを現実化する際の方法は受講生に任せること、結果を自身で選択させること、の3点を特に配慮した。以下、創作グループごとのテーマと結果を述べる。

- ①「くるみ割り人形」の物語を短い「お話」として改作し、その語りの中で使用するテーマ曲を創作。最終的にピアノ独奏曲として完成。
- ②絵本「わたしのワンピース」の中で繰り返される文章に作曲。絵本を通した読み聞かせの中で歌ったり、器楽のみでBGMとしたりする形式で全体的に使用。
- ③絵本「みず ちゃぼん」の短い言葉のフレーズに音程を付け、それを利用した楽曲をピアノで作曲。さらに絵本の中の擬音を打楽器で表現し、楽曲とミックスした。
- ④絵本「ノンタン いない いない」の中で繰り返される文章に作曲。言葉に合わせ、楽曲そのものが変化して行く形式で、読み聞かせ全体に使用。
- ⑤物語「マッチ売りの少女」を改作し、その最初と最後に歌うイメージソングを作詞、作曲。
- ⑥絵本「びっくり まつぼっくり」を読み聞かせする際、話の最中に歌うためのオリジナルの挿入歌を作詞、作曲。

創作に続き、各グループでの発表と相互評価を授業のまとめとして行った。オリジナリティの強さで言えば③「みず ちゃぼん」、楽曲の質と完成度の高さで言えば②「わたしのワンピース」(譜例③)が目立つものであったが、どれも保育所、幼稚園、小学校の音楽表現活動の際に用いる教材として、十分なクオリティと独自性を持っているものと判断している。

3.6 まとめ

この授業において、音楽表現領域における教育活動の実践に「独自の工夫」を行う経験をした学生が、将来自身が務めを果たす保育・教育現場でそれを実現できるかどうか、成績評価を行っている際、常に念頭にあった。自身の表現への積極性、経験と自信、教育環境への働きかけ、こどもとの信頼関係構築など、音楽表現上の能力以外の重要な要素が数多く思い浮かぶ。これらの事柄を少しでも授業の中で伝え、思考させ、学習者として望ましい行動へと導くことができれば、彼らの保育者・教育者としての資質の向上に大きく貢献することも可能であろう。

最後に授業アンケートにあった一人の受講生の言葉を紹介して「まとめ」としたい。「みんなの評価を聞いて、自分が考えている以上に良い曲だと言ってもらえたことが嬉しかった。他のグループの人たちが、私たちの作った曲を口ずさんでくれていて、いつかこどもたちも同じように口ずさんでくれるかなと想像した。」

譜例①

ぞうのたまごのたまごやき

詩 寺村輝夫

ぞうぞう ぞう たまごをうんだ ぞう たまごをだいてる ぞう

7
ど こだッ ど こだッ ぞう は やく で て こ い ぞ う

譜例②

ぐりとぐらのうた

The musical score is written for piano and voice in 2/4 time. It consists of five systems of music. The first system (measures 1-8) features a piano introduction with triplets in both hands and a vocal line starting with the lyrics 'あ おいぼうし の ぐりがい て あ' and 'いつもいっしょ に あそんで る'. A repeat sign is placed above the vocal line at measure 8. The second system (measures 9-15) continues the vocal line with lyrics 'かいぼうし の ぐらが い る ぐりぐ らぐりぐ らぐりぐ らぐりぐ' and 'なかよしの の ねずみ さん'. The third system (measures 16-23) includes lyrics 'ら ぐり - とぐ ら きょう は'. The fourth system (measures 24-31) includes lyrics 'ふたりに なにしよ う もりーの なか で おさんぼ だ おうたを'. The fifth system (measures 32-39) includes lyrics 'うたって おどっ ちゃ お いち に いちに さんし ら'. The score concludes with a 'D.S.' (Da Capo) instruction at the end of the fifth system.

4. 手作り楽器とその活用

4.1 新しい試み

保育者養成課程において「こどもと音楽」の授業を担当するようになって、筆者は2019年度で3年目になる。毎年こども学科1年次後期に履修することになっているこの授業について、この秋から3度目の授業を行うにあたり、ぜひ授業に取り入れたいと思っている新しい試みがある。それは「手作り楽器とその活用」である。その理由や内容、方法について述べていく。

4.2 きっかけとなったイベント

手作り楽器については以前から興味をもっていたが、昨年、実際にこどもたちと手作り楽器の体験を共有する機会があった。ある認定こども園から、夏休みの親子イベント企画でのチェロとの共演依頼があり、内容を相談する中で、楽器作りのワークショップを提案してみたところ、喜んで賛同していただくことができた。イベントの概要は次の通りである。タイトルは「親子で楽しむ手作り楽器」。まずチェロとピアノによるミニコンサートで演奏を実際に聴いてもらう、次に楽器作りのコーナー。卒業研究の課題として「手作り楽器」に取り組んでいたゼミの学生が担当させていただいた。マラカスやカスタネット等の作り方の説明をした後、親子で楽器作りの時間。最後には、それぞれが作った楽器を用いて「幸せなら手をたたこう」の「手をたたこう」の部分で「楽器鳴らそう」として皆で合奏するというものであった。

こどもたちが楽器を作る様子を見てみると、卵のパックや牛乳のパック等皆同じ材料を使いながら、それを飾ったり何かの形に見立てたりする自由なアイデアや創造性は私自身の想像を遥かに超える豊かなものであった。最後に皆で歌ったり合奏した時には、こどもたちは本当に元気に歌い、また体を動かしながらリズムをとって、嬉しそうに手作りの楽器で演奏していた。

立本千寿子は『音楽表現』の中で「一人ひとりの手作り楽器を制作し、それを用いてひとつの音楽的作品を創るという過程は、造形表現と音楽表現と身体表現の総合的な表現であると言える。」¹と述べているが、まさにそのことを実感した次第である。以来、いずれ「こどもと音楽」の授業に取り入れたいと思いつけてきた。

4.3 保育所保育指針に示されている「表現」領域の内容との関連

平成29年3月に厚生労働省により発表された「保育所保育指針」²をあらためて見てみると、「表現」の領域の内容について次のように示されている。

- ①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。
- ②音楽、リズムやそれに合わせた体の動きを楽しむ。
- ③生活の中で様々な音、形、色、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりし

て楽しむ。

- ④歌を歌ったり、簡単な手遊びや全身を使う遊びを楽しんだりする。
- ⑤保育士等からの話や、生活や遊びの中での出来事を通して、イメージを豊かにする。
- ⑥生活や遊びの中で、興味のあることや経験したことなどを自分なりに表現する。

これから述べる「手作り楽器とその活用」は、実際には上記の③の「味と香り」以外の全ての要素を網羅する取り組みであると言えるだろう。

4. 4 人間の本質としての、音楽への共感と楽器遊び

1) 楽しさの重要性

『音楽表現』の中で、立本千寿子はさらに次のように述べている。「遊びは、乳幼児の生活の根幹であり情緒的安定や知的発達も、全て遊びを基盤として達成されていくと言っても過言ではない。また、音楽的な表現活動の基本もそこにある。こどもにとってはあくまで遊びの延長であるかもしれないが、何より純粋に楽しい、面白いという快の感情を伴うものであることが重要である。」³

この純粋に楽しい、面白いという部分に関しては、筆者自身「0歳児からのコンサート」等で実際にこどもたちと接する中で、リズムカルな音楽が聞こえてくると、こどもたちが生き生きとした表情となり、自然に楽しそうに体を動かしたりすることは経験上知っている。と同時にそれは、こどもに限らず人間の本質に基づくものであると考えている。その象徴といえるものの一つが、17世紀後半から18世紀にかけてヨーロッパで大流行した「トルコ行進曲」であろう。

2) 「トルコ行進曲」に見る人間の本質

1683年オスマン帝国の第二次ウィーン包囲に随行した軍楽隊メヘテルは、兵士たちの士気を上げるために、打楽器を多用した威勢の良い2拍子の曲を演奏していた。当時音楽を聴くという機会が減多になかったヨーロッパの民衆は、それを聞いて驚き熱狂する。トルコ風の音楽が大流行し、モーツァルトやベートーヴェンの「トルコ行進曲」をはじめ多くの作曲家が「トルコ風の音楽」を作曲し、しかも驚くことには、そのトルコ風行進曲を少しでもトルコ風に演奏するために、メヘテルの特徴である打楽器を模した音が出るような特殊なペダルをもつピアノが作られたのである。演奏中にこのペダルを使うと、一人でピアノを弾きながら同時に打楽器も演奏しているような効果がある。新しい楽器まで作ってしまった当時の情熱には驚くが、冷静に考えてみると、この行動はきわめて人間の本質的なことのように思われる。

浜口順子は『領域 表現』の中で「こどもたちの生活は、初めての経験に満ちている」「興味や関心を引くことや面白そうなことなどを探索し、それを見つけると自分でもすぐと同じことをやってみようとする、見てまねることは人間の基本的な行動の一つ」⁴と述べているが、メヘテルに熱狂し、新しいピアノまで制作してしまった大人たちも全く同じであり、音楽に心を揺さぶられ、それを自分でも再現しようとすることは、人間の本質であると言っ

て間違いないであろう。

4.5 「手作り楽器とその活用」の内容

1) 授業において学生に伝えたいこと

『領域 表現』の中で浜口順子はさらに「保育者は表現の楽しさを知っていること、表現に対して興味をもち何でもやってみようとする姿勢が大切」「楽しいという気持ちを根本に置きながら、こども達に活動を投げかけていく保育者の指導は、こどもの心を揺り動かす力を持っている」と述べている。⁵

筆者はこれまで、学生たちにまずは音楽の楽しさを実感してほしいと思って授業を行ってきた。歌うこと、楽器を演奏すること、合奏すること、音楽に合わせて身体を動かす等が中心であったが、今期はさらに、色々な音を自分の中に取り込んで、それをあらためて発信することの能動的な体験を通してその楽しさを知ってほしいと考えている。

2) 授業において取り入れたい内容

ここでいう手作り楽器とは、楽曲を演奏するためのものだけでなく、擬音のための道具も視野に入れている。

①楽器を含めた色々な身の回りの音を聴くこと

雨・風・波・雷や虫の声等の自然界にある音、身の回りから聞こえてくる様々な音に耳を傾ける。またすでに楽器としての形を成しているものの音を聴いたり、叩く、擦る、引っ掻く、振る等様々な音の出し方を知る。

②同じような音（楽器を含む）を作る工夫

身の回りから聞こえてくる音を、身近な材料を使って再現することを試みる。音の出し方によって、また同じ出し方でも素材によって全く違う音になることを体験する。

③イメージに合わせて音を作る工夫

紙芝居や絵本など、見ているこどもたちのイメージがより膨らむように、物語の中で場面に合わせて音を加えることを試みる。

④手作り楽器で演奏する

こどもの発達段階を理解し、それに合わせた手作り楽器の知識を得る。認定こども園のイベントで行ったように、作成した楽器を用いて、曲に合わせて楽器を鳴らしたり合奏を楽しむ。

3) 授業での目標

筆者は前稿「音楽表現領域の指導に関する考察（1）」の中で、「こどもと音楽」の授業の概要について説明した。⁶ 半期のこの授業のハイライトは「ぼっけ」におけるサークルタイムである。学生たちはグループに分かれて10～15分程度のプログラムを行う。テーマを見つけ、それに沿った導入・歌・合奏・紙芝居・絵本・手遊び・パネルシアターなどを組み合わせたプログラムを考え、実際に「ぼっけ」に来ている地域の親子の前で実演する。その際に、今期は新たに物語の場面に沿った手作りの音（音楽）を自分たちの感覚と方法で添える

ことを課題にする予定である。

4.6 まとめ

誰でも日頃は聞こえてくる音を無意識に選別して、自分に関係のあることや興味のあることしか聞こえていることを認識していない。学生たちには固定観念を捨て耳をすまして、子どもたちのように純粋にキャッチした音を、工夫して再現する過程を楽しんでほしい。そして今、新たな試みに一步を踏み出す私自身も、どのように楽しめるかワクワクしている。

おわりに（金井）

子ども学部開設から今日まで12年間で、2度の大きな保育指針・幼稚園教育要領及び小学校学習指導要領の改定または改訂が行われた。その改定または改訂に沿った教育課程の見直しが本学部でも当然行われたが、音楽表現領域科目群については学部開設当初からの教育方針を大きく変えることなく、新しい課程に移行しようとしている。2回にわたり、浦和大学子ども学部における音楽表現領域科目群のねらいや個々の授業の教育実践報告、教材・指導のあり方について述べてきた。各教員が、保育指針や指導要領を視軸としながら、そして何よりも自ら楽しみながら、日々子どもたちに音楽の楽しさを伝えるための学生への教育を進化させていきたいと思っている。

註

1. 立本千寿子（谷田貝公昭 監修）『音楽表現』一藝社 2018年 p.24
2. 厚生労働省『保育所保育指針』2017年
3. 立本千寿子（谷田貝公昭 監修）『音楽表現』一藝社 2018年 p.22
4. 浜口順子『領域 表現』萌文書林 2007年 p.141
5. 浜口順子『領域 表現』萌文書林 2007年 p.141
6. 金井玲子「音楽表現領域の指導に関する考察（1）」浦和大学・浦和短期大学部『浦和論叢』第58号 2018年 pp.103-106

参考文献

- [1] 文部科学省『小学校学習指導要領』2017年
- [2] 佐野靖 編著『小学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』教育芸術社 2018年
- [3] 竹内秀男 編著『実践から生まれたイラストで見る発声法と合唱指導—すぐに役立つ授業マニュアル85—』教育芸術社 1997年
- [4] 汐巻公子 著『大人の音楽ドリル 入門編』ヤマハミュージックメディア 2007年
- [5] 寺村輝夫『ぞうのたまごのたまごやき』理論社 1998年
- [6] なかがわりえこ／おおむらゆりこ『ぐりとぐら』福音館書店 1967年
- [7] にしまきかやこ『わたしのワンピース』こぐま社 1969年
- [8] 厚生労働省『保育所保育指針』2017年

- [9] 谷田貝公昭 監修『音楽表現』一藝社 2018年
- [10] 無藤隆 監修『領域 表現』萌文書林 2007年
- [11] 小林紀子・砂上史子・服部育子『新しい保育講座⑩ 保育内容 表現』ミネルヴァ書房 2019年
- [12] 河合正雄 著『まーぼーおじさんと手づくり楽器をつくろう』株式会社 音楽センター 2005年
- [13] 坂口博樹 著『シンコー・ミュージック・ムック 100円ショップで手作り楽器』シンコー・ミュージック・エンタテイメント 2011年
- [14] 赤羽美希 著『たのしい楽器あそびと合奏の本』株式会社 ヤマハミュージックエンタテインメントホールディングス 2017年
- [15] 高御堂愛子・植田光子・木許隆 監修・編著『楽しい音楽表現』圭文社 2009年

Summary

A study of subjects in the area of music expression (2) ;
Through the programs for training teachers for nursery schools,
kindergartens and elementary schools

Yuki Umemoto, Reiko Kanai, Kuniaki Kojima, Masao Deguchi

This paper is a report on the implementation (by the teaching staff in charge) and the future prospects of the four classes on musical expression in the Department of Child Studies at Urawa University. These classes are excluding those designed to teach piano performance skills. The curriculum in the field of musical expression organized by this Department offers training courses for nursery school, kindergarten, and elementary school teachers. The aim of these courses is to teach students to meet the practical demands of nursery school and educational settings while, facilitating their understanding of the essence of “expression” to train them to be nursery school teachers and kindergarten/elementary school teachers who are able to cultivate children’s ability to express a wide range of emotions.

Keywords Musical expression, expression via singing,
expression using musical instruments, concert, creation, songwriting,
musical culture, nursery school teacher training,
early childhood education, primary education, teaching course

(2019年11月7日受領)